

(ページコラム 1) 副大臣・政務官・事業仕分け議員の働きぶり

少し前になるが、「こんなに政治家が働くのを見たことがない」と官僚が言ったという新聞報道を見た。具体的に、どこの官僚が、どの政治家を指して言ったかの記述はなかったが、政権交代で何と言っても大きく変わったのは、副大臣、政務官の働きぶりだろう。

20世紀には各省に「政務次官」と称する政治家が配置されていたが、世間一般では「盲腸」と揶揄されることもあり、ほとんど無用の存在としか見られていなかった。実際、私の官僚時代の経験では、大臣決済を必要とする重要文書の場合、その前に事務次官の決裁を経ることは必須だが、政務次官の決裁を経る必要は原則としてなかった。

2001年に「政務次官」が「副大臣」とより立派そうな職名に変わり、更に「大臣政務官」という職も加わって、彼らが各省をリードするようになると思った方もいただろうが、報道等で見ると、今回の政権交代前には、実態が大きく変わることはなかった。

それを象徴するのが、定例記者会見である。各省の大臣と事務次官は定例記者会見を行っていたが、政務官はもちろん、副大臣ですら、多くの省で定例記者会見を行っていなかった。要するに、省の考えを代表して述べるのは、大臣や事務次官であって、相変わらず、副大臣や政務官は「かやの外」に置かれていたケースが多かったのである。

ところが、政権交代後は、事務次官の定例記者会見は全廃され、代わって、副大臣が定例的に記者会見を行っている省が多い。テレビ等でも、副大臣や政務官が出演し、その職責に関して責任ある受け答えをしているケースがよく見られようになった。彼らがお飾りではなく、政策決定に主体的に関わっているからこそ、できることだと思う。

このような副大臣、政務官の変貌ぶりが注目される一方で、内閣に入らなかった与党議員はどうかという点が種々取りざたされていたが、最近では、人数は少ないながら「事業仕分け」という活躍の舞台を得た議員たちの目覚ましい働きぶりが大評判になった。

ネットで中継してくれたので、私自身も授業のない日は朝から晩までほとんどいずれかの分科会を視聴していたが、よく事前準備されたことがうかがえるテンポの速いやり取りが続き、少しも退屈しなかった。仕分けの最終日を終えて「くたくたになった」と漏らしていた議員もいたが、ほんとうによく働かれたと敬意を表したい。

しかし、翻って考えると、国会議員たるもの、本来、国民のために一般の官僚などよりもよほど働くべきなのではないのか。なぜなら、国会議員の歳費は、一般職の国家公務員の最高の給与額を下回らないことが法律で定められており、なんらの役職についていない議員でも、事務次官と同額の給与を得ている。しかも、歳費のほかに使途報告義務のない「文書通信交通滞在費」を毎月100万円も別途支給され、これには課税もされない。

選挙区のためにではなく、国民全体のために、予算のムダを削減すべく、くたくたになるまで働いてくれる議員が出てきたことは大歓迎だが、これこそが国会議員のあるべき姿だということを確認する必要がある。国民全体のために働くべき責務は、官僚だけにあるのではない。国会議員は、官僚より厚遇されている分、もっと働いて然るべきである。